

砲術師幕臣井上貫流の事蹟

武衛流四世威遠館演銃場主人・幕府蝦夷地高嶋陣屋禦防卒長

しろはく 古地図と城の博物館 富原文庫 代表富原道晴

1) はじめに一井上貫流との関わり

1960年代から中世城郭の縄張調査ともに、広く兵法・軍学に関わる城郭の絵図、文書調査を実施している。砲術は城郭の変遷や合戦に表裏一体の関わりがあり、特に中世城郭の複雑な縄張が近世城郭の規模は大きいが単純かつ規格化される過程、又、幕末全国千に数える台場に備砲として数千の大砲が供給される過程、この時代、砲術、築城、軍艦が国防の基本であった。日本と世界の視野の差が問われた時代であった。

今回、課題とする井上貫流に関わる一連の文書、絵図と出くわしたのは1991年5月から、1993年5月に至る2年間、延べ16回に渡る出会いであった。大量の砲術書との巡り合いは、1991年12月31日であり、砲術書と井上家3代に及ぶ文書類で、始めて、その全貌と資料の性格が理解できた。2002年6月しろはく双書2号として、砲術記録の内1冊『武州西台徳丸原文化9年砲術記録』を紹介した。2005年6月には日本銃砲史学会で詳細に検討した結果報告を画像を交えて行った。2006年1月江戸東京博物館が所蔵される井上貫流左衛門文書の整理をされるに際し、当文庫の井上貫流文書の調査を希望されたため、砲術書の内、井上貫流に関わる物のみ、目録を作成した。『富原文庫所蔵砲術資料目録1・井上貫流文書目録』に収録した215点の大砲絵図、砲術書、起請文である。江戸東京博物館は1994年に井上貫流3代の日記類251点を入手、2006年3月『幕臣井上貫流左衛門家文書の世界』を発表され、井上家に就いて多くを明らかにされると共に全国に散在する井上貫流文書の所在を明らかにされた。結果として、砲術資料の大半が当文庫の所蔵である事が判明し、今回、板橋区立郷土資料館が江戸の砲術展を開催されるに際し、和流砲術として、井上貫流砲術文書の初公開を行う事となった。公開の必要上、ほとんどの文書を解析し砲術師井上貫流を明らかにする事とした。論点は大きく3つになる。第1は砲術師井上貫流そのもの、出生から、砲術師範、さらに、幕臣となるまで、第2は文化5年、6年の蝦夷地警備であり、特に石狩湾高嶋陣屋における記録、第3は文化9年徳丸原砲術調練、高島秋帆を溯る事29年前の幕府から見た記録である。井上貫流は好奇心の深い人で、情報収集能力は追隨を許さず、深い知識に裏付けされた工夫のできる人であった。その姿は幕臣という立場を得て、機密情報の入手等、益々、生き生きとしてくる。日本中からあらゆる砲術資料情報を集積する事が出来た。井上貫流砲術資料が意義を持つのはこのような貫流の位置、砲術実技に裏付けられた研究活動、卓越した記録能力に有ると思われる。当時、世界の空白地帯、未知の土地といわれ、列強の領土

拡張の最後の地域、太平洋北方圏に対する各国の動向、ロシアピョートル大帝指示によるベーリングのシベリア探検、北方開発、南進、イギリスの植民地政策のインド、清国からの北進、それに対峙するアメリカの太平洋捕鯨事業、英米の小笠原領有権論争等、幕府の鎖国による情報不足によって生じるところの異国船騒動、幕末の混乱と軍制改革、大砲生産、軍艦築造等対応の背景は割愛する。

2) 砲術師井上貫流の事蹟

井上貫流は文化5年1808年正月26日幕府鉄砲方井上左太夫の推挙により、扶持米20人口を与えられ、幕府鉄砲方与力として蝦夷地警備の任に就いた。この後の井上貫流の活躍の記録は勤書等井上家日記に詳細を極める。井上貫流は元文5年1740年9月9日、武州忍城主阿部豊後守正充の家臣梅村金左衛門次将の三男として、今の埼玉県行田市忍城で生まれた。文化9年1812年12月10日73歳、江戸で死亡しているから、文化9年7月28日の徳丸原砲術調練は、亡くなるわずか4ヶ月余り前の事になる。幕臣に推挙された時点で既に68歳で、まさに、終生、砲術にかけた当時最先端の砲術家であったといえる。

井上左太夫は慶長19年徳川秀忠に召抱えられ、田付流ともに、井上流として歴代幕府鉄砲方の要職に有った。井上貫流は梅村次将の3男として生まれ、宝暦3年1753年13歳の時、井上重九郎という記録が2代貫流左衛門によってされている。宝暦12年1762年には上州沼田藩士水谷氏の養子となり、沼田城内1貫目筒の図を残しているが、まもなく、同家を去り、西国遊学している。明和元年1764年武衛流棒火矢絵図秘伝書に梅村実平の名が有り、父次将も秘伝を受けている。明和2年にも実平の記録が有り、明和6年1769年8月には比叡山で雲仙道人から楯秘伝書を井上貫流名で受けている。これが記録では井上貫流の初見である。従って、13歳幼名井上重九郎、24歳では梅村実平、29歳で井上貫流を名乗っている。井上氏は貫流の父次将が養子である為にその本姓水口城主三雲氏の別姓としている。従って、大方の期待に反し、幕府鉄砲方井上左太夫との関係は幕府官僚としての上下関係のみで、氏名に縁はない。13歳から武衛流岩崎時起の砲術講義聞書きをしており、23歳の時点では父次将も武衛流秘伝を伝授され、又、甲州流兵法軍法之巻は父、梅村金左衛門尉から伝授されている。これらは貫流の天才的才能が家系にも由来する物である事を物語っている。なお、父次将の役職は明和元年1764年で忍藩町奉行との忍藩阿部家の記録が残されている。

井上貫流が武衛流四世を岩崎時起から受けるのは何時であろうか。秘伝書、砲術文書では江戸に戻り、医業を開業した時点で、寛政4年1792年東都井上貫流東武台山下火砲真用隠士井上貫流、寛政7年1795年武衛流後学砲真用隠士井上貫流直、同井上貫流直子温とあり、寛政10年1798年7月始めて武衛流四世井上貫流と見える。寛政8年1796年には御普請見習平山子龍が37歳で入門している。又、入門起請文も寛政10年から見る事が出来る。この事から井上貫流の武衛流伝世は寛政7年以降10年まで、55歳から58歳の間となる。

武衛流は嶋原の乱の際、江戸表からの大筒石火矢運送難儀から老中松平伊豆守が注目した、中川流短筒之法を元祖武衛市郎左衛門義樹が相伝し、大筒之抱打を工夫し、その子8人によって諸家に流布したとある。武衛義樹は元祖とし、2代開発門人渡辺景綱から3代次男岩崎時起となり、井上貫流に伝世された。武衛流砲術家としての貫流は甲州流兵法を赤上勘兵衛から、其の他、日記からは野矢某から無辺流槍術、川澄某から鞍馬流馬術、京都で御園玄蕃介から鍼術、中山法眼から内科、比叡山で長崎の雲仙道人から紅毛の火術、外科の医術、江戸で幕府奥医師法印多紀安元に内外科と報告されている。砲術では数10挺の鉄砲を一斉発射する銃車之絵図、武衛流の秘伝聞書、棒火矢絵図、火砲鳥銃、短鳥銃、石火矢、近火矢、火術体用、焙烙玉図集、木筒仕掛、松明狼煙、楯秘伝書、火矢秘伝、独輪車銃図説、火箭、火砲問答、武衛流系譜、砲薬之巻、斎藤流卒隊之巻、南蛮筒、異風筒解説、鳥銃火槍、棒火矢製作之手続き書、宇治田流砲術伝記、砲洛玉、火砲図説、火砲真用、大砲切型、大砲絵図、千打記録、荻野流鉄砲打順、中嶋流昼夜打図、筒注文書、町打記録、大砲鑄造唐銅割合、砲術流派一覧等幅広い流派を研究する一方、幕臣として、幕府各所の大砲調査の記録が有り、その内容は江戸城内砲術上覧吹上御庭角場絵図、権現様持筒、大坂御鉄砲奉行改絵図、御物大銃之記、紅葉山下宝庫巨砲点検、江戸城諸櫓多門有之御筒吟味とある。さらに、西洋砲術の関心も極めて高く、多くの翻訳本を研究している。署名本のみでも 兵禄佛狼機銃図解、守銃攻銃図解、佛狼機銃国字解、西洋火攻神器説和解、泰西海陸必要正真火器製造書、紅毛火術秘伝抄と多岐に及ぶ。銃剣、銃陣といった西洋式砲術、兵法の前段といえる。起請文前書は砲術入門誓であるが、寛政10年から文化7年までで6通残されている。秘伝の伝授に、多くの砲術家の育成、大筒の大量生産、戦艦、台場の大量供給体制を必要とした時代との激変を感じる。幕府に取りたてられるまでの井上貫流の砲術修行はこのように300冊近い砲術書を記録し、同等の日記類が残され、幕臣としての明治に至る井上家の活躍は江戸東京博物館報告書に詳細である。ここでは、武衛流四世の井上貫流の事蹟を記録したい。

文化5年1808年正月威遠館演銃場之壁書 鉄砲稽古心得之事 威遠館主人 克明館主人とある。井上貫流は江戸に武衛流演銃場を経営していたと思われる。威遠館は蝦夷地でも使用している事から井上貫流の砲術道場の名称、克明館は医術医院の名称か。

井上貫流は幕臣後、井上左太夫の命により、文化6年3月10日貫流の名前が異風との理由で貫流左衛門に改名している。文書類の署名年代もこれを境に分ける事が出来る。

それでは井上貫流という流儀、明倫堂講義項目とされている貫流銃術とは何であろうか。

延享4年1747年11月『砲家武衛氏譜』は2代渡辺景綱の事蹟として、武衛流皆伝とし、武芸として、則心流槍、富田流剣術、一宮流居合、伯耆流居合、五伝流居合、以下町見、馬術、軍術、鳥居流砲術、儒学、神道、歌学、筆道、馬医、地方、内藤流剣術を伝授した人名ともに記録し、当時の兵法家の幅の広さを伝えている。

文化6年1809年3月井上貫流69歳の記録では、小筒至要集等三目録、算法の巻等中段の免許、遠陽新伝等大筒免許、近・抱・遠の火矢三段、火矢薬法・短筒・大火矢・砲禄

玉等十四巻が武衛流として列挙され、武衛流末流に至り、自分の工夫を加え改め相加と有る。古伝の工夫は米村流異風筒之留方、立放は藤岡流工夫、筒短きハ中川流、火矢は鳥居流、其外火術は追々工夫、諸流度量しき一流之奇法全備して、貫之英流なりという。砲術文書は西洋流の翻訳本から、各流派の秘伝書とまさに、砲術総てに及んでいる。奇法としての銃陣、移動用自由砲架の設計等を含め、それは秘伝という領域を越え近代砲術に脱皮する兆候かもしれない。又、火砲業説では、武術は護国の道にして、死生存亡の力なりという海国兵談を引用している。

3) 蝦夷地高嶋陣屋の防衛体制

蝦夷地タカシマは石狩湾の西岸、明治には小樽—ウラジオストックを結ぶ航路が有り、要港小樽に北接している。嘉永7年1854年蝦夷地全図、安政2年1855年蝦夷海陸路程全図にも運上屋所在地として明記されている。当時としては著名な土地であった。

幕府は対外脅威に対応して、寛政改革を実施、江戸湾や蝦夷地の防衛計画が立てられた。宇田川武久氏は天明から寛政にかけて、幕府が武芸者の調査を実施、武芸による幕臣取立が実施され、砲術は異国船防禦の要術として奨励されたと報告されている。このような背景の中、文化5年1808年正月26日幕臣となった井上貫流は28日蝦夷地高嶋防禦御用を任じられ、3月15日砲手8名家来6名と江戸を出立、途中松前で鉄砲、火薬を準備、6月1日蝦夷地タカシマに着き、角場の造営、鮭網漁で鉄砲止になる7月19日までの間、42日の砲術稽古を実施している。幸いこの間異国船の襲来はなかったが、大坂城からの大筒配備、木砲砲台設営、火薬調合、火矢の製作、6月13日には使番村上監物視察を受けている。8月20日—26日順次タカシマを引き上げ、11月4日江戸に帰着した。

この時の蝦夷地警備全般について、『文化5辰年持場割』井上貫流によると

仙台藩2000人、南部藩250人、会津藩1600人、津軽藩250人計4100人の持場が明記され、渡辺、松嶋、依田、佐藤、井上、斎藤、森重、西尾等砲術師範を含め47の砲術師が砲術台場の設営や、火薬武器準備等防衛体制構築に当たっている。

タカシマの守備範囲はイシカリ、ノブシヤ、オタルナイよりフルウとされ調役木原半兵衛、御禦防卒長井上貫流以下9名の砲術師が記入され、津軽藩士100名の一部の守備領域とされている。

井上貫流は6月1日着岸後巡見し、西蝦夷地高嶋之略図を作成、絵図には津軽家人数は越年の場所非禦防とし、蝦夷人四十九軒170人、惣乙名モンド、タカシマ、テミヤ、シクツシの蝦夷人調査、船数、津軽藩陣屋規模、沿岸水深、井戸、運上所、砲術方住居を記入、防衛設備として大砲2門砲座、矢場、的、焰硝蔵、狼煙台、木砲台場の配備を描いている。

『タカシマ禦防禦備記録』が有り

1貫目玉鉄鑄筒1挺(鉄玉20)、3百目玉鉄鑄筒1挺自由台付(散玉2000、鉛玉30)、五十目玉筒3挺、百目玉短筒10挺(勿火矢30、焼火矢20本、陸より船中へ火矢隠し打ち)3貫目玉、6貫目玉木砲各1挺、(2挺ツクツシ鼻仕掛)外寇上陸の際は8人2段構え、御備御貯玉大小3000余、他に散玉、鉄切玉2000とある。

さらに、『蝦夷地御備場大筒野図』として2代貫流となる井上末五郎のスケッチが上記タカシマの2門の大砲、松前白神崎、蝦夷地イシカリの備砲の銃口拓本が残されている。いずれも大坂城中からの海運としている。

4) 文化9年1812年武州西台徳丸原砲術記録

寛政4年1792年7月幕府は徳丸原に砲術町打場を新設、従来の鎌倉由比ガ浜の大筒稽古は三百目玉以上とし、それ以下を徳丸原とした。著名な高島秋帆の西洋砲術演習は天保12年1841年5月9日で、開設後49年を経過している。又、嘉永3年1850年には6・7月から8月まで延長されているが、安政3年1856年6月17日には6年間訓練が中止された。理由は6-8月限定で四季打ちが出来ない。射程が8町しかない。出水が多い。大砲の運送に不便。計画中の越中島調練場の利用等である。文久2年1862年5月21日越中島では野戦の実地に薄いとして名称を大筒稽古場から調練場として再開し、幕末に至っている。井上貫流による徳丸原砲術記録は高島秋帆を溯る事29年、徳丸原砲術70年の歴史の中であまり知られる事の無かった開場20年後、初期の砲術訓練の手続きを幕府側から明らかにした詳細な記録である。

原題『徳丸原にて大筒稽古願候一件並諸入用留』内題 文化九年申四月武州西台徳丸原 大筒稽古之儀願候一件控 徳丸原稽古諸入用控 初代井上貫流左衛門直 73歳自筆本 4月1日から7月29日までの120日編年記録、収録書信20通

4月1日徳丸原大筒稽古願候書付 井上貫流左衛門 請取江戸赤坂井上左太夫

提出 倅井上末五郎 受取井上左太夫用人森川七平、

目的 末五郎と門人への砲術伝達

内容 大筒町打稽古及火業等試打

借用願 御幕御場所仮小屋玉見塚其他諸道具順用 御筒拝領

鉄砲方井上左太夫差出 若年寄堀田摂津守申上候書付 4月

紹介 井上貫流左衛門文化5年蝦夷地、文化6年松前、彼地大筒火術打試仕候

内容 4月から7月2度大筒火業稽古仕候 御幕場所仮小屋諸道具順用 御筒拝領

打方 手附井上貫流左衛門 倅末五郎

場所 武州西台徳丸原

期間 本年より年々夏中2度

稽古願いは上司井上左太夫から若年寄へ提出され、年間2回とされているが、初代貫流左衛門は12月に死去している、2代貫流左衛門は天保13年1842年7月15日、嘉永5年1852年6月12日、7月15日徳丸原砲術稽古を実施している。

5月15日稽古許可は提出後1ヶ月半井上左太夫から伝達された。

堀田摂津守附札 6月から7月稽古可 日割申付委細御目付へ

井上末五郎は5月15日、貫流左衛門は5月18日赤坂井上左太夫へ御礼に

5月28日徳丸原稽古廻状 年番御持所 徳永小膳組与力渡辺房次郎

徳丸原稽古小屋場 5月25日出来木越次右衛門役所申越

日割書付 6月2日御目付佐野肥後守より差出御積り

6月武州西台徳丸原大筒町打稽古日割書付 御持所 徳永小膳組与力渡辺房次郎

6月27日御先手御鉄砲方幕命井上左太夫手附井上貫流左衛門

7月25日井上貫流左衛門（他4名省略）

廻状承知 下書 津田左兵衛方順奉す

6月4日稽古人足手配（人足手配漏れ22日までやり取り）

6月25日井上貫流左衛門病氣明後27日稽古出来ず書面、左太夫へ、さらに、御目付佐野肥後守へ

7月4日徳丸原出水の様子 戸田川出水、渡し、通路溜り候間、徳丸原も出水

7月16日17日風雨

7月18日井上左太夫へ御届 7月21日武州西台徳丸原大筒稽古――

7月19日明日徳丸原稽古雇人足先触 大塚町三右衛門方へ

賃人足11人21日明け七ツ時（4時）出宅越申候

7月19日戸田川出水稽古難相成 明後21日稽古延引仕候 井上左太夫へ御届

7月20日19日の稽古様子依田大三郎門人に聞く、場所出水稽古打ち残し候

7月22日渡辺房次郎入来、雨天続き延引、当月晦日も近く、来る28日一緒と申し入れ

7月24日明25日も戸田川出水の為、稽古難相成 同流の義に付、渡辺房次郎一緒稽古御

届 渡辺幾馬から井上左太夫を経て、御目付佐野肥後守へ

何回かのやり取りの後、御目付佐野肥後守から許可

7月26日先触 賃人足3人明後28日明け七時（4時）出宅罷越

7月27日徳丸廻し船1隻 御高屋河岸船宿伊豆屋権左衛門方へ

木筒2挺其外雑具積込 四つ時（10時）出船

7月28日今暁寅之刻（4時）、徳丸原へ出立、無程 板橋宿へ出で、四つ時（10時）徳丸原着

御小人目付 宇佐美置吉 対面 稽古相始

昼之業 七ツ半（5時）打ち仕舞 記録 御小人目付提出

夜に入 五ツ半(8時)場所引払い

名主徳丸原代吉次郎 人足3人雇い練馬まで

7月29日暁七ツ時(4時)帰宅

井上左太夫へ稽古案書手紙差出し

返書 徳丸原大筒稽古滞りなく御打ち仕舞い候

5) まとめ

井上貫流を読み解くには、いささか時間不足でしたが、今回始めて全文書絵図を検証しました。検証したのは井上貫流の行動です。膨大な砲術技術の検証では有りません。和流砲術が西洋砲術を貪欲に取り込んでいる中で、和流砲術、西洋砲術という技術があつて、混沌とし、何を持って和流砲術家、西洋砲術家というのか、考えさせられました。西洋の銃

剣や銃陣、歩兵・騎兵・砲兵といった3兵戦術もいずれ工兵を交えた四兵となります。すべての知見は先の時代の先進技術を越えて生まれます。砲術師の思考は、築城家や測量師と同じく、時代の先進技術でした。本稿が割愛した井上貫流家2代以降の事蹟については江戸東京博物館の業績を、又、砲術についての内容は宇田川先生の江戸の砲術を合せ御参照頂きたい。